

## 土佐から出た土木界の巨人

### 廣井博士と野中兼山に就いて……(2)

兼山は濱口内閣以上の緊縮政策を實行し  
廣井博士また節約簡易生活の範をなす

○  
廣井博士と野中兼山と能く一致してゐる點は朝早く起きる事、酒を飲まぬ事、娯樂も趣味もかゝない事、最も此等は常に信仰的な正義觀念の強い研究家又は事業家大人物には共通の點であるかも知れない。

○  
廣井博士のイビキは其雷の如き響と俱に現代に稀なものにして有名である。北海道の名長官北垣國道氏を始め、廣井博士の同僚や先輩や、後進學生に至るまで、恐らく廣井博士と同宿した程の人は何人も其の雷の如きイビキに悩まされてをる。或人は驚嘆し、或人は怒り、或人は賞讃し、或人は念佛を唱へて一夜を明したのものもある。博士のイビキは遂に外國にまでも響いてをる。

イビキの高いのは其人の健康と精神の天真爛漫なるを表象するものである。實に廣井博士の平生には病氣らしい病氣はなかつた、それは青年時代から強固なる信仰生活を以て身を持するの節制が徹底してをつた故とも思はれる。若し病氣があつたごすればそれは博士特有の大イビキ其物であつたかも知れない。イビキに関する逸話も面白いものが澤山あるが、それは傳記の逸話篇に入れ度いと思ふ。

○  
廣井博士の精神の天真爛漫であつた事は、此も信仰生活の御蔭だと思はれる。博士は決して策を弄する人ではなかつた、實力のありの儘を以て總てに對した、飾るごか、テラふごかは元より毫厘もない、實力以上の門戸を

張る事は絶対にない。技術家たるものは常に破究を忘つてはならないが、常に自分の實力以下の仕事を以て満足すべきである、ご云ふ考であつた。

世人往々實力以上の仕事を成さんが爲めに暮夜密かに大官の門を潜り、或は心にもない劣悪なる手段を弄するものあれば、博士は『さぞ寢心地の悪い事であらう』ご言はれてゐた。博士は他人を排して自ら利己的な進出をせんごする人を最も憐まれた。

兼山のイビキが高いか何うか今知る由もないが、健康な人であつた事は想像出来る。況んや兼山の大事業をなすに當つては一點利己の念はない、總て君國の爲めに一身を獻けてをる態度である。

○  
土佐出身の濱口首相は今や緊縮政策を標榜して天下の人心を正道に戻さうご努めてゐるが、兼山は二百六十年前既に此の政策を土佐に強制してをる、兼山の緊縮政策は濱口内閣ごころのものではない、實に痛快な徹底ぶりである。而して我が廣井博士が又實に緊縮の範を示した人であつた、廣井博士の緊縮は口で言ふのでなく自分の日常が總て其表現であつた、之は兼山の日常ご能く似てをる。

○  
現内閣の某閣僚が古洋服を裏返して再用してをるごかで、其の節約振りを珍らしさうに報道されてをるが、廣井博士は常に裏返し實行家であつた、新調の時は襟ボタンの穴をあけさせないので御用を承はる白木屋洋服部も

不思議がつてゐた。

博士が地方に出張して旅館に着くと屬官の方を立派な室に通して、服装の古い博士は下等室に通されてニコニコしてをる、直ぐにわかかつて主人が平アママリするなごの事が時々あつた。

○

野中兼山は人道的な逸話に乏しい様であるが、廣井博士にはそれが澤山にある。之は廣井博士が大學教授として多數の學生を指導されたから、博士の人格が種んな場合に學生達にひらめいてゐるものと思はれる。

廣井博士は性格的には兼山よりも甚しく平凡な人であつた、兼山は善行を自分の部下のみならず、藩國全體に強制する事を怠らなかつた、然も之が爲めには極端な制裁を加へた。廣井博士は善行なご云ふ事を人に強いる事をしないばかりでなく、道義的な訓戒めいた事は平素決して口外しなかつた。博士が工學者としての研究的態度の熾烈なりしは何人も知つてゐるが、博士が青年時代から基督教の敬虔なる信仰家である事を知つた人は稀である。

○

廣井博士も若い時には世間一般の信仰家の如く堂々公衆の前で正義の熱辯を振ふたものである。あの温厚なる博士が札幌農學校學生時代には正に信ずる時は他の同級生が言ひ得ない處を言つて外人教授に對して一步も譲らなかつたご云ふ事である。

○

廣井博士が新婚後初めて北海道へ夫人を案内された時、汽車の同室に喫煙してをる一外人があつたのを見て、博士は車中禁煙の紳士道を力説して遂に謝罪せしめたなごは、中年以後の博士に見られぬ事である、博士は前半生の正義堂々たるに引かへ後半生の唯自分一人を善處するに努めたかの感がある。廣井博士の人格を細説するには其變化の内的要素をも考察しなければならぬが、此は非常に重大

な問題であつて、今我々が誌上に發表すべき問題ではない。

○

近頃或るベルト會社の社長が功勞ある技師の死に對し數萬圓の弔慰金を贈り遺族には年金千八百圓宛を贈る事にしたご云ふ美談が傳へられてをるが、富豪が斯んな事をするのは當然な事で些つとも珍らしくないが、月給二百五十圓の大學教授たる廣井博士がシバシバ貧困者にめぐみを施され、學校、學會、教會等へも常に寄附されてをる。

○

或冬の寒い夜に外出されんごする博士に夫人は心盡の温い新調の羽織を被せて出したが歸宅の時は既に羽織はなかつた、夫人は餘りの事に博士に尋ねたが、そんな事は聞くものでないご、寒さにフルへてゐた路傍の一老人にくれた事は遂に夫人にも言はなかつた。

博士が僅かな収入の中から貯へる年々五百圓の金を四谷の傳道義會の貧民救濟費に寄附してゐた事なご殆んご門弟さへも知らなかつた。

此に似た面白い逸話は廣井博士の一生を通じて澤山あるが、それは博士の傳記に譲り爰には進んで兼山の痛快なる政策ぶりを説き度い。

○

兼山は土佐藩下の奢侈遊惰を戒むる爲め、娛樂の一たる踊相撲の類を禁じ、酒の程度を制限し、朝寢にまで罰を課したのである。違反のものは國法で罰するは勿論、時には兼山自ら反則者を發見して鎗に刺したなごの事もあつた、如何に彼の實行が峻烈なりしかを想像出来る。

兼山が禁酒を勵行する爲めに設けた罰則は極端なもので、土佐の諺に

赤面三匁、生酔五匁、千鳥足十匁  
ご云ふのがある。酒で赤い顔してゐてさへ三匁の罰を課せられた、婚禮の時なご酒入用のものは庄屋の證明書を貰ふて酒を買つたのである。(岡崎生)